

# 大法輪

昭和9年9月28日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）  
平成30年2月1日発行  
第85巻2号

## 特集Ⅱ 仏教がわかるキーワード

《仏教一般がわかるキーワード》 釈尊の教えのキーワード／仏道修行のキーワード／大乘菩薩道のキーワード／龍樹の教えのキーワード／唯識・華嚴思想のキーワード 《日本仏教の教えがわかるキーワード》 最澄・空海・法然・親鸞・道元・日蓮・白隠の教えのキーワードほか  
〈新連載〉国際的視野から読む『撰集抄』 | 千草子 / 〈講演〉弘法大師の社会事業 | 福田亮成



白き朝・赤岳 錦織 重治

2

# お寺さん、出番です!

〔前編〕

## 仏教が必要な人に届いていますか?



すぐれ けいこ  
**勝 桂子**

行政書士・葬祭カウンセラー

本誌新年号(平成三十年一月号)の特集記事「名利住職めいしきつによる新春初説法」を、ありがたく拝読しています。

他人を思いやる慈悲の心が幸せにつながるということ。いまこそ求められる、仏教という平和思想の重要性。結論を急がずに心の余裕を持つことの大切さ。欲望にブ

レーキをかけることのすすめ。ほぼすべての法話が、数年来の世界的テロと、ミサイル攻撃の脅威に対する提言を背景に語られています。

どの法話も尊く、心に深く響くと感じます。しかしその尊い名言が、「家には寝に帰るだけ」という多忙なサラリーマンや、困窮生活に追われるシングルマザー、さらには新たに参政権を得た十代の人たちに、はたしてどのくらい届いているのかと思いをはせると、遺憾ながら「届くべきところに、届いていない」ように感じられ、無念でなりません。物理的に届ける手段はあるはずですが、Twitterなどのソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)で、心を打たれた読者の誰かがそれを紹介し、共感した人たちが拡散してゆけば、より多くの人に伝わる機会はあるはずなのです。本誌読者にもSNSを使いこなす三十代や四十代の人はいるはずですが、なぜ話題になるほどには拡散されないのでしょうか。

### ツール次第で若い人へも伝わる

SNSという道具は便利なもので、記号#で表される

「ハッシュタグ」と呼ばれる一種のコードを付することで、同じ話題に共感する人たちの間だけで、爆発的にひろめられることができます。また、マスメディアのように費用をかければひろまるものではなく、真に共感する人がいなければ、なかなか拡散されません。裏を返せばSNSは、共感を得ることができさえすれば、マスメディアの宣伝をもしのぐ力をもつものです。つまり、全国津々浦々で広告を展開する大手企業に、宗教者集団が対抗してゆく手段として、大いに期待できるツールでもあるのです。

各宗門はSNSのアカウントを持つて発信をしていますが、宗祖の遠忌や大きな催しの告知が中心で、心に訴えかけるような言葉や、布教につながる内容は少ないように感じます。一国の首相や大統領もTwitterで発信する時代ですが、伝統宗派はまだこれらのツールに対して保守的です。近年、回答者全員が現役僧侶の相談



hasunohaのトップページ

サイト「hasunoha」がSNS等でも話題になり、その一角を崩しました。「Yahoo!知恵袋みたいになんて、不快な煽りなどもほとんどないサイトがあるよ」という利用者による紹介文が、Twitterで二万件以上リツイート（内容が興味深いので他の人にも伝えること）され、一気に話題となったのです。拙著『心が軽くなる

仏教とのつきあいかた』（啓文社書房）でもご紹介していますが、五年前の開設当初、当サイトに寄せられる質問の半数以上は、ご供養の方法など仏事相談だったそうです。ところが、Twitterで反響を呼んで以来、パソコンやスマートフォンに向かって日々悶々と悩んでいた若い人たちが、日常的な心の悩みを積極的に寄せるようになりました。

毎月三十万人がこのサイトを訪れ、累計二万五千件の質問が寄せられています。代表的なQ&Aは書籍化もされました。回答する僧侶が二百人いても手が足りないほどの質問

が日々寄せられ、回答僧侶の募集が行われています。最近、「人間関係」や「自己嫌悪・心の持ち方」についての相談が大半で、死別の悩みや「死にたい」という相談もときどきあります（死についての相談は、日常的な相談の約四分の一）。供養についての質問は、いまでは一割にも満たなくなりました。

たった五年間で、当初は葬儀供養の相談が過半だった状態から、このような変化が起こったことを評価したいです。利用者による紹介がTwitterというSNSに眩（つぶや）かれ、それが爆発的な共感と呼んだことにより、一般市民にも「お坊さんって、人生相談をしてもいい相手なんだ！」ということが伝わりました。それが、自宅のパソコンやスマートフォンからでも容易にアクセスできる場であったことで、葬儀供養一辺倒と思われていた寺の役割が大きく変わったのです。

一般的なサイトで共感した場合に押される「いいね」というボタンに当たるものが、hasunohaでは「有り難し」となっています。また問答の内容を他のSNSで紹介するための「シェアボタン」の横に、「この問答

を娑婆（しゃば）にも伝える」という文字が刻まれています。一般社会（娑婆）とは異なる場所で、僧侶という聖職者に相談している、ということを意識させるこうした細かな仕掛けが、商売や勝ち負けを優先する日常とは隔絶された異空間であることを感じさせ、多くの人の共感を呼ぶ要素になったことはいまでもありません。

このhasunohaの成功からわかることは二つあります。人々は、いつでも相談できるくらい身近だけれども、娑婆に生きる私たちとは異質の価値観を持つ僧侶を求めているということ。そして仏教は、いまを生きる現役の社会人や学生にも、充分に必要とされているという事です。必要とされているにもかかわらず、お寺で開催される法要や催しという場だけでは、人生相談に発展しづらいという構造が横たわっています。

### 「苦悩を抱えたら寺へ」と頼られるよう

伝統宗教は、多くの人々が深く感動するエピソードの宝庫です。個々のエピソードが、一部の名利や宗教書読者の間でだけ知られるのではなく、現実社会を生きる多数

の人々の日常に響くかたちに適切に翻案され置換されたならば、hasunohaのように瞬時に拡散されてもおかしくはないはず。しかし現実には、なかなか伝わってゆきません。

近年、大地震や風水害が激化するなか、迅速に被災地支援に駆けつける宗教者の姿が目立つようになりましただけで数十人いらっしゃいます。保護司としての活動、自死念慮者や遺族との往復書簡、ひきこもりやニートのための傾聴活動など、こころのサポートを日常的に手がける僧侶も、全国で千人を超えていると思います。しかし、僧籍を保持しているかたがおよそ三十万人。うち現役の僧侶として活動しているかたが三分の一として、十万人の現役僧侶がいらっしゃるとすれば、これらの活動に恒常的に携わっているかたは、まだ数万パーセントにすぎません。こうした僧侶が二十パーセントを超え、五人に一人以上になってくれば、おそらく社会のなかに「なにかあれば僧侶に相談してみよう！」という気運が戻ってくるのではないでしょうか。

息がわからなくなっても知らん顔ということはあつてはならないはず。年に一度のはがき連絡や一方的な寺報の郵送のみならず、春秋彼岸に必ず墓参していたかたが見えなければ連絡できる通信手段などを、これからは整えてゆくべきではないでしょうか。

内閣府「第八回高齢者の生活と意識に関する国際比較調査」(平成二十七年)という、六十五歳以上の男女へのアンケート調査があります。アメリカ、ドイツ、スウェーデン、日本の四カ国を比較したもので、「同居の家族以外に頼れる人はいない」と答えた人の割合は日本が一番多く、また「近所の人たちとの付き合い方」の項目では、「物をあげたりもらったりする」だけは日本がダントツの一位ですが、「相談ごとがあつた時、相談したりされたりする」、「病気の時に助け合う」、「お茶や食事を一緒にする」という、いわゆる生老病苦に関することでは、日本はいずれも最下位です。

欧米の高齢者は毎週教会へ通っている、帰りにお茶や食事ともにし人生を語り合い、病気になるれば助け合うのだということです。毎週来ていたはずの誰かが突

むろん、社会貢献ばかりが宗教者がしなければならぬことではありません。檀家だけを救済の対象とするお寺があつてもよいと思います。いわゆる檀家寺であつても、病の人がいれば励ましにゆき、瀕死の人がいれば手をとり臨終の瞬間を看取るような僧侶のほうが多数となれば、現役社会人や困窮する人々も、悩みや困りごとがあればメンタルクリニックへ行く代わりに、近くの寺院へ足を運ぶようになるでしょう。

現状では、檀信徒の家庭に病人やひきこもりの青少年がいても、菩提寺の住職が相談に乗れるケースはごくわずか、亡くなってから初めて寺へ連絡が来るという場合のほうが多いのではないのでしょうか。葬祭業者からは、単身の檀信徒が認知症になってしまうと、墓を何十年も守り檀家関係を続けてきたにもかかわらず、自分の入るべき墓の最寄駅さえわからなくなり、遺骨は市役所の倉庫に眠るといふ悲劇も起き始めていると聞きます。

檀家といえば、戒名を授けるべき仏弟子であり、出家された僧侶にとつては、血を分けた親族以上のつながりであるはず。永代使用料を納めてもらっているのに、消

然姿を見せなくなれば、教会仲間が自宅や市役所へ連絡をし、必ず救いの手が伸びます。日本でもこれからは、寺院がそうした役割を担ってゆくべきなのではないでしょうか。

単身の檀家を対象に、看取り(危急の報があれば施設や病院から緊急連絡先として寺へ連絡が来るように手配しておき、亡くなった場合は葬儀・火葬を済ませ納骨する、などの死後の事務)をこなしてゆくもよいと思います。また、欧米の教会にならつて、気軽に参加できる茶話会や法話会をこれまでより頻繁に定期的に行うもよいでしょう。

ともかくにも、個々の寺院が「死んだら連絡するところ」から「悩みができたら相談するところ」へ転換してゆけば、寺の世界をよく知る人たちの間でだけ聞かれている有益な法話が一般市民へと伝わり、やがてはSNSなどで共感してもらえる可能性もひろがって、現役社会人や日々苦悩を抱える困窮者という、もつとも釈尊の教えを必要としているであろう人たちのもとへ届けられ、ゆくくと信じています。

(今回は、お寺が具体的に何を発信すべきかを考えます)